

▲▲▲ 苛烈なトレランレース 志賀高原から野反湖へ ▲▲▲

金田 安代

いろいろな山に登ってきてどこもすばらしい山ばかりだった。雪のある山も登り、強風や深雪にめげたことも何度かあった。余儀なく敗退させられたり遭難も経験した。どれもこれも思い出がぎっしりと詰まった時間ばかりで、これひとつとは決め難い。ただ、いろいろな山行を振り返ってみると、順調にスコーンと登ることができた山よりも、苦しくて厳しかった山の方が記憶に残っている。

山の文章なら皆さんが出されるので、私は「忘れ得ないトレランレース」をここに出すことにした。いつまでも強く記憶に残るそのレースは、今から11年前、2008年6月29日にOSJ主催で開催された。志賀高原の高天ヶ原スキー場をスタートして、岩菅山への登山道を進み尾根上のノッキリという変わった地名の所に出て南下して赤石山へ、そこからは東に向かってひたすら野反湖を目指す。ここまで25km、ここから野反湖周辺の峰を巡って野反湖を一周してゴールする15km、合計で40kmのレースだった。

スタート地点の標高は1,650m程、コース中一番高いのは2,300m程の金山沢の頭というピークだった。アップダウンは多く標高差650m、距離40km、いつもながらゴールできるか不安ばかりだった。梅雨時真最中、当日は朝から雨、おまけに周囲はガスが立ち込めていた。スタートの時から雨具を着るレースは初めてだった。悪天はこれからも悪くなるという予報だったようで、スタート前に後半の野反湖一周の15kmは中止と伝えられ、結局25kmのレースとなった。その時は少し気が楽になったのだが……。一緒に参加した矢澤さんと同僚の3名でスタートラインに立った。始まってしまった。ガスに覆われどこに向かっているのかさっぱり分からなかったが、集団と一緒に進んだ。高度が上がるのに伴い、ガスは濃くなり風を感じるようになった。そんな状況だったのでどこを通ったのか未だに分からない。また矢澤さんや同僚も既に視界からは消えていた。

ここからは断片的な記憶を書いていく。上りの山道は濁流となっていた。常に風が強く耳元で雨具がバタバタと音を立てていた。平坦な山道では太腿まで浸かる様な水溜まりがあった。そこを通過する時に残雪が水の中にあった。そういえば志賀高原は豪雪地帯なののだと思った。試走の時に見た赤石山からの大沼池は、赤石山さえ分からず意識の中にも浮かんで来なかった。ただ前へという気持ちだけだった。足を一步出せばゴールは一步近づく。私が山から学んだことはそれだった。

この天候の下、2,000m級の稜線は厳しかった。下りになると身体が冷え、疲労凍死という言葉が浮かんだ。止まったらダメだと思った。

トレランレースは時間が経つほどに集団がバラバラになり、自分の前後に誰もいなくなって不安になる。この時の私は幸運だった。後半に入っていたと思う頃、女性ランナーと一緒にになった。前に出たり後ろになったりと、併走をゴール手前まで続けた。最後は彼女に先に行ってもらった。そしてゴールできた。達成感を感じることはなくただ寒いだけだった。着替えに行くより先に身体を暖めたくて、ボランティアの方々が作るトン汁をいただくと思ったが、皆同じ思いとみえ、列が長くさらに寒くなり諦めた。着替えのために体育館に向かうと矢澤さんが外に立っていた。矢澤さんは30分程前にゴールしたと言った。こんな天候では遭難するからレースをリタイアするように伝えようと電話したが繋がらなかったと言った。そしてゴールの握手をした。

着替えて安堵したが同僚はまだ来ない。電話も繋がらない。放送では、雨量が〇〇mmを越えたら通行止めになると言っていた。えっ足止めで帰れなくなる？最後尾で同僚がゴールした。登山の経験も少なくトレランの経験も少ない初心者である。感激したと同時に安心した。通行止めの放送は緊迫していた。

レース中に一緒になった女性は40代で一位だった。そして私は50代で一位だった。表彰式もなく、足早に志賀高原までシャトルバスで戻った。今では、こんなレースはもうできないと思う。

(完)